

伝統的道具にあらたな魅力をデザインする

9月「ギフトショー」に匠会3度目の出展から、早いもので2ヶ月が経過します。

木工女子向けの新製品開発事業は、いよいよ試作品づくりに入り、従来の大工道具の切れ味に「より使いやすく、実際の動きによりフィットしたデザインで」という視点を加えて動き出しています。

先月この事業に対して、力強いサポーターを得ることができました。新潟市在住の気鋭のデザイナー石川竜太さんが、デザイン面からの提案を下されることになりました。石川さんは、阿賀野市（水原）の染物業「越後亀紺屋藤岡染工場」のパッケージデザインで、「日本パッケージデザイン大賞 2015」の銅賞を先日獲得されています。ペットボトル「生茶」のデザインでも有名で、まさに日本デザイン界若手のホープ。

伝統＝古い というイメージを、どんな提案で覆して下されるか期待し、私たちも新製品作りに前向きに取り組みたいです。



「燕 磨き屋一番館」を見学してきました

アドバイザー川越仁恵さんのお誘いを受け、先日久住会長と共に、燕市の磨き屋シンジケートと、若手の育成機関である「磨き屋一番館」の視察をしてきました。

燕市は洋食器など金属加工産業の集積地ですが、約83%が従業員10人未満の中小企

業で、それぞれが分業して製品を完成させるモノづくりのまち。その最終工程を担う「磨き」は個人事業者が多く、高齢化による廃業で年々減少しているといえます。



燕市では金属研磨技術の継承を図るため、平成19年から研磨振興協同組合に委託して研修生を受け入れ、3年間奨学金を支給して技術を磨かせています。年間3～4名を受け入れ、この日は6名の若者が実習中。磨き屋にかかる委託料1880万は市の自主財源と聞き、燕市の命運をかけた地場産業への意気込みを感じました。

高度な技能を有する人をマイスターとして認定し技能継承活動を行っているのも、地域としての強い危機感が後押しをしているのでしょう。どこも同じ、必死です。



研修生の研磨を待つ企業からの受託ステンレス製品。ここでの工賃も研修生の収入となるシステムだ。

11月は「ふいごまつり」ものづくりフェア」と続きます！力を合わせやりぬきましょう。